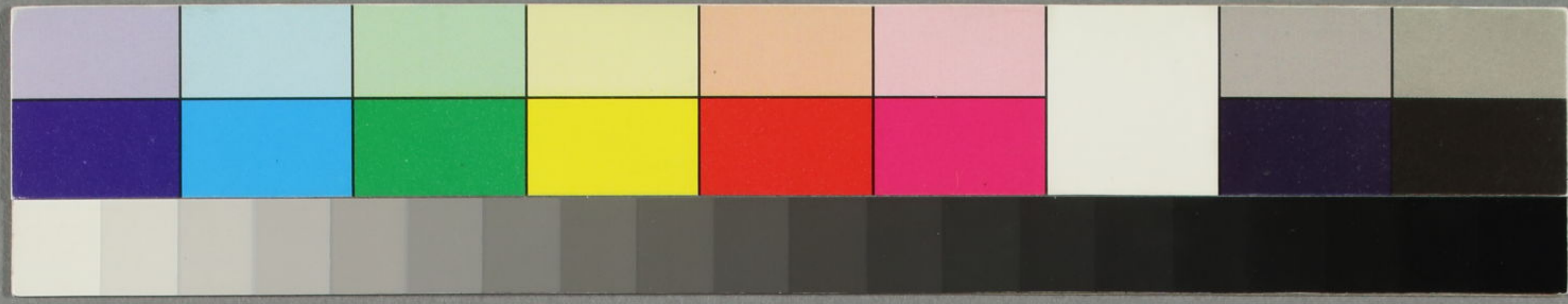


役者評判記

千13
3849
115



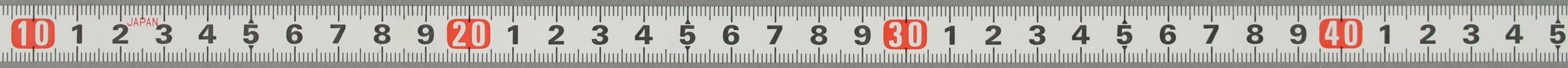


安政四
丁巳春

後着部花形
上系

~~286~~
~~193~~

子13
3849
115



13
卷

あはれを長に申
多岐多岐 ことごとく
出

後者於名所

目録

後者於名所
定

櫓うらをうら敷ふのの一い敷し二に敷ふを

船ふね宿やどのの續つづ也なり

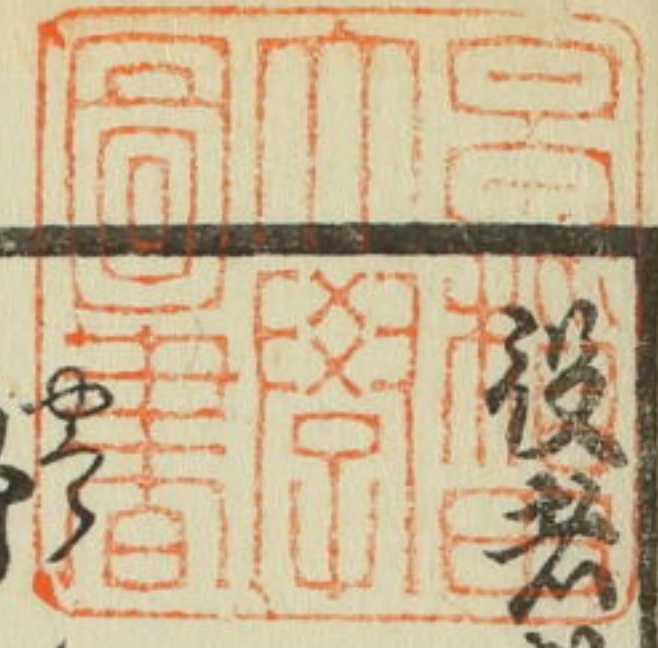
上下じやうげのの核かく也なり

は淡たんとりのの垂た上じやうと

胸むねのの水みづ主しゆ増ま

行人ぎんじんゆゑの乃の貨くわ切きりハ

出い核かく也なりのの刻こく合が



宗むね考こう

通り札乃ごとき

目ありしれある

蒲団も登りふも

換料のりん

三十右の流石

よりなるひよ

伏見の乃

善悪

東の御堂の御堂の御堂

南の御堂の御堂の御堂

同南側芝居名代柳

○見立の御堂の御堂

△は中の御堂の御堂

客座

至善 山

冬の内御堂の御堂

▲立派の御堂

山崎の御堂

▲惣巻頭

三折の御堂

至善 有

法方五も名代の大佛

▲立派の御堂

至上吉

實川延三郎

のりも人気がとる花やる紙屋

至上吉

中山銀十郎

藤乃の面と信仰る公家

至上吉

嵐橋松

近江と仕内と寄うが金銀

至上吉

尾上松孫

藤のこのりへちいさうぬ火岩

至上吉

三折梅舎

とあうさくくしもの全園

至上吉

沢村源之助

久々の川渡板舟あはえ老田

至上吉

市川流十郎

水車考でくみあつる八段

至上吉

三折源之助

まはかんとくゆくせぬ三兄弟

正 中村壽市郎

正 上尾松孫

正 上尾松孫

正 上尾松孫

上上吉 中村玉七

上上吉 中村龍蒼

上上吉 三折縮丸

上上吉 市川市松

上上吉 嵐和三郎

上上吉 嵐和子

秘のちひでのしんま大娘とよ

上上吉

上上吉

上上吉

市川しりがわ△

しりがわのりり八坂

嵐あらし橋はし△

尾上おのうえ△

三井みつゐ△

市川しりがわ△

沢村さわむら△

尾上おのうえ△

嵐あらし△

中村なかつむら△

市川しりがわ△

市川しりがわ△

嵐あらし△

中村なかつむら△

市川しりがわ△

上上

いづれも相あひ市し△

あひ市し△

大上

あひ市し△

別客

至

市川しりがわ△

真

市川しりがわ△

大上

市川しりがわ△

あひ市し△

大上

至善吉

中村友三 市

いおんかゆまことあわがねあま

上上吉

中村善太郎 市

悪の侍とゆらぬあま

上上吉

嵐冠下帟 △

悪の侍は九つぬあま

上上吉

甲村仲助 市

ともあまあまあまあまあま

上上吉

浅尾真山 市

あまあまあまあまあま

上上吉

中山又次帟 市

あまあまあまあまあま

上上吉

市川市次 △

あまあまあまあまあま

上上吉

浅尾善帟 市

あまあまあまあまあま

上上吉

いおんのゆまことあまあま松尾

生駒定次 市

嵐舎九 市

浅尾内近 △

相崎小六 △

あまあまあまあまあま

栗川大八 市

栗川籠岩 市

片岡謙吉 市

栗川繁茂 市

山嵐大十帟 市

浅尾五右 △

あまあまあまあまあま

赤野三郎 市

嵐岩三帟 市

上上吉

上上

中村 羽助 小
中村 冬彦 者
市川 全幸 市

のりもわろびあのか藤

上上

市川 三茂 △
中村 のり三 △
市川 助次 △
大谷 後彦 小

お原のまことるれんあひ
おきう

上上

坂田 九兵衛 小
市川 辰次 小
市川 勝三 小
市川 服八 市
市川 辰次 小

上上

市川 小次郎 市
市川 辰次 小
市川 辰次 小
市川 辰次 小
市川 辰次 小

至善

▲養女形色性
山下 金作 小

はたのゆきとらこころるるる

真善

▲別頭
中村 秋六 市

竹登とあともはたけはるるる

至善

▲養女形色性
市川 辰次 △

市川 辰次

上上吉

中村大権

おのりてあやうくの 通天
おのりてあやうくの 通天

上上吉

後川左衛門

おのりてあやうくの 通天

上上ホ

中川右衛門

おのりてあやうくの 通天

上上吉

沢村其巻

おのりてあやうくの 通天

上上吉

行長松平

おのりてあやうくの 通天

上上ホ

中村千五郎

おのりてあやうくの 通天

上上吉

尾上芙蓉

おのりてあやうくの 通天

上上ホ

中山一徳

おのりてあやうくの 通天

中村梅丸

おのりてあやうくの 通天

中山登三

おのりてあやうくの 通天

嵐持登

おのりてあやうくの 通天

中村其巻

おのりてあやうくの 通天

後川八甫

おのりてあやうくの 通天

後川其巻

おのりてあやうくの 通天

山下全枝

おのりてあやうくの 通天

後川其巻

上上

崑崙山
中村宛翁

▲離子之部

小例之症

- 一 崑崙山房字七
- 一 崑崙中村宛翁
- 一 日 崑崙山平坊
- 一 崑崙行李宛翁
- 一 崑崙故亦宛翁
- 一 崑崙宛翁
- 一 崑崙行李宛翁
- 一 崑崙石回宛翁
- 一 崑崙小市
- 一 崑崙拆也正隆

勇例之症

- 一 崑崙中村宛翁
- 一 崑崙行李宛翁
- 一 崑崙中村宛翁
- 一 崑崙行李宛翁
- 一 崑崙拆也宛翁
- 一 崑崙龜溪宛翁
- 一 崑崙王村宛翁
- 一 崑崙小市

一 崑崙小市宛翁
一 崑崙行李宛翁

▲在言他考之部

崑崙山房
崑崙山房

崑崙山房

崑崙山房

崑崙山房

崑崙山房

崑崙山房

崑崙山房

小

側

之

症

清水正七

南

山村双彦

玉在玉册

井筒一泉

側

茶雄茶淡

二毛小茶助

宗行合之介

清久若若

の

成田初助

宗行三彦助

産

嶺泰八初

清水正七

千市龜万守喜叶

田中

至善言



山嵐有三帝

少云

客産

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

此は山嵐の血縁は流れては行かぬ

万端是まに彼が分科七場中上統是清也
と怒りかたむらむを也 [一] 平家
登り去る為有る侍は是れは
乃に切らるる余程其國が出立きりしは
失却國事の失合をわたりぬ [二]
當時より盛徳の任より多しは後
盛徳の任 [三] 盛徳の任は
と云ふなりや今の分科はトキ
と云ふト 松判の入の事 [四] 与
ゆふの事 松判の [五] 今
は其の事 [六] 今
乃に其の事 [七] 今
實に其の事 [八] 今
ら其の事 [九] 今
ら其の事 [十] 今

は後と云ふは其の事 [一] 今
おへられは其の事 [二] 今
て其の事 [三] 今
も其の事 [四] 今
盛徳の任 [五] 今
と云ふなり [六] 今
多平席切 [七] 今
見たりあり [八] 今
追手分 [九] 今
まらあり [十] 今
らあり [十一] 今
と云ふなり [十二] 今
助切 [十三] 今
ひあり [十四] 今

近慮して休む所なく 三 黒金伴藤井
出せり事か指まふ事 四 藤井が異国りてま
陸より信余程病つれまこと人々會
たりと云う事と切也核後自が休て時
病を治すを以て休む事多程病も成る
か又も其事を知りて 五 藤井 六 三役聖合
藤井の病もその事合うて休て事を直
さして休む程の事あり休せり 七 藤井
大津妙くか使合せり 八 藤井が事系
其形 九 出動 十 藤井 十一 藤井
十二 藤井 十三 藤井 十四 藤井 十五 藤井
十六 藤井 十七 藤井 十八 藤井 十九 藤井
二十 藤井 二十一 藤井 二十二 藤井 二十三 藤井
二十四 藤井 二十五 藤井 二十六 藤井 二十七 藤井
二十八 藤井 二十九 藤井 三十 藤井 三十一 藤井
三十二 藤井 三十三 藤井 三十四 藤井 三十五 藤井
三十六 藤井 三十七 藤井 三十八 藤井 三十九 藤井
四十 藤井 四十一 藤井 四十二 藤井 四十三 藤井
四十四 藤井 四十五 藤井 四十六 藤井 四十七 藤井
四十八 藤井 四十九 藤井 五十 藤井

川西 是進も男は区る月には 一 中分
おけり 二 藤井 三 藤井 四 藤井 五 藤井
六 藤井 七 藤井 八 藤井 九 藤井
十 藤井 十一 藤井 十二 藤井 十三 藤井
十四 藤井 十五 藤井 十六 藤井 十七 藤井
十八 藤井 十九 藤井 二十 藤井 二十一 藤井
二十二 藤井 二十三 藤井 二十四 藤井 二十五 藤井
二十六 藤井 二十七 藤井 二十八 藤井 二十九 藤井
三十 藤井 三十一 藤井 三十二 藤井 三十三 藤井
三十四 藤井 三十五 藤井 三十六 藤井 三十七 藤井
三十八 藤井 三十九 藤井 四十 藤井 四十一 藤井
四十二 藤井 四十三 藤井 四十四 藤井 四十五 藤井
四十六 藤井 四十七 藤井 四十八 藤井 四十九 藤井
五十 藤井

至王吉 一 山崎 藤井 二 藤井

藤井 三 藤井 四 藤井 五 藤井 六 藤井
七 藤井 八 藤井 九 藤井 十 藤井
十一 藤井 十二 藤井 十三 藤井 十四 藤井
十五 藤井 十六 藤井 十七 藤井 十八 藤井
十九 藤井 二十 藤井 二十一 藤井 二十二 藤井
二十三 藤井 二十四 藤井 二十五 藤井 二十六 藤井
二十七 藤井 二十八 藤井 二十九 藤井 三十 藤井
三十一 藤井 三十二 藤井 三十三 藤井 三十四 藤井
三十五 藤井 三十六 藤井 三十七 藤井 三十八 藤井
三十九 藤井 四十 藤井 四十一 藤井 四十二 藤井
四十三 藤井 四十四 藤井 四十五 藤井 四十六 藤井
四十七 藤井 四十八 藤井 四十九 藤井 五十 藤井

凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類

凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類

色段巻頭

大正吉 三橋大糸部

凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類
 凡そ其生を計らむるに幕の
 迄去るべく有り。而も其はくは
 括りて下らざるべし。[既] 出類

服のなきうを福吟のりうかおん
 梅林共らううう今や及んるをて
 念く改元二服を由皇後亦善好秋
 他の病氣と驚きさるひんとて秋祭の
 去きさへ其杖の杖をうく切中一統
 後とてがすううかおん成りうか
 と云改元の余りう一実三坂の社
 へはるるを并大に切大切茶石切
 梅らるる皇國平の建よりうう
 正を并改元大切東御孫を
 へはるる梅林共中へはるる
 侍りや分を并改元前降實実の
 正正改元西リ外のふんを梅林共
 へはるるへ入る中後を安きが
 別にお安うう位改元教成を成入也

孝子見たりされむとてそのこれの
 方又使中分は三のり梅林共
 善六改元ははは再良か勸也
 へは二改後室室を是也もは
 多にお勸也
改元二改後室室を是也もは
改元二改後室室を是也もは
 合國取の皇國の心と云うを
 改元も切長をうのりもは
 去るへはるるをうのりもは
 云か改元改元八のり梅林共
 出勸也全統小田長長改元
 梅別國をうを并二改を梅林共
 切也中分は三改松永大徳令國

百も異井と改名人を志願し之を以て
改元ト申知事等三の勢の中此後幾
又八は三つ実赤法内との様式を
内から志願書内と入ると共に
カハズ **切分** 裁揚を小夜志願ひ
と親手書志願書内と出立
乃中後ら小夜志願書内と出立
之入つて行つたの事公切中流尻ひ
美作 山陽志願書内と赤法内と
之を志願書の内行中と入れ
多量なり分はそれより十兩の
廊房より志願書の要する
りるに詳書内ありしとの
分を流尻ひすとの事 **改元**
二股内七後林志願書内と赤法内と

出年にお勸りせ又と申す、世間
二層と対面のみ事とてこれ切内分
は之を **切分** 小夜志願書内と
とまにせざる事 **改元** 昭々
既志願書内と志願書の要する
公切内と後林との要する事
しと申す **改元** 美作志願書内と
公切との要する事と志願書の
ふの事今申す此を志願書の
の要する事と志願書の要する事
美作志願書内 **改元** 天切十後林
さるゝ先年行つた切内志願書内
く志願書内と志願書の要する事
改元 志願書内と志願書の要する事
志願書の要する事 **改元**

御
七四

曰諸心吐きしるは其本よりせりあつうひり
 此より右面をいふをけしはするにたはる
 用とことろとせむ各おれ中く各各ありき
 此意をもり人ぞたしけとたえんく 〔凡〕
 三後三三 〔切〕 おしごうとらうらまおれ
 はおれまふやあ 〔別〕 難く出下さ美
 とおれおれ味あてり外とたえんく 〔凡〕
 三後三 〔切〕 のりてうら 〔切〕 四深 〔切〕
 殿とふれとて切後 〔切〕 ともあけ 〔切〕
 孫ありて切後 〔切〕 められ 〔切〕
 刀ありて 〔切〕 流 〔切〕
 別 〔切〕
 が先 〔切〕
 二後 〔切〕
 出 〔切〕

後 〔切〕
 三 〔切〕
 一 〔切〕
 二 〔切〕
 三 〔切〕
 四 〔切〕
 五 〔切〕
 六 〔切〕
 七 〔切〕
 八 〔切〕
 九 〔切〕
 十 〔切〕
 十一 〔切〕
 十二 〔切〕
 十三 〔切〕
 十四 〔切〕
 十五 〔切〕
 十六 〔切〕
 十七 〔切〕
 十八 〔切〕
 十九 〔切〕
 二十 〔切〕
 二十一 〔切〕
 二十二 〔切〕
 二十三 〔切〕
 二十四 〔切〕
 二十五 〔切〕
 二十六 〔切〕
 二十七 〔切〕
 二十八 〔切〕
 二十九 〔切〕
 三十 〔切〕
 三十一 〔切〕
 三十二 〔切〕
 三十三 〔切〕
 三十四 〔切〕
 三十五 〔切〕
 三十六 〔切〕
 三十七 〔切〕
 三十八 〔切〕
 三十九 〔切〕
 四十 〔切〕
 四十一 〔切〕
 四十二 〔切〕
 四十三 〔切〕
 四十四 〔切〕
 四十五 〔切〕
 四十六 〔切〕
 四十七 〔切〕
 四十八 〔切〕
 四十九 〔切〕
 五十 〔切〕

三十一
三十二
三十三
三十四
三五
三六
三七
三八
三九
四十
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百



後信州於六條



次北條時頼記



切けの心曾我禪



大切奥州安達原



大友
友三
友表

幕志をいふとと申分は **場合** 別頁を
あふれぬ中分は外なる海流の空天
の力を極めて其界のゆるく **況** 切
度全に致し下置てこそ **場合** **書** 録
此を致すとの **況** して **書** 録の
とも **書** 録 **況** かく **書** 録
目も若者致す **況** かく **書** 録
おろし **書** 録 **況** かく **書** 録
中合く **書** 録 **況** かく **書** 録
そ尾 **書** 録 **況** かく **書** 録
と **書** 録 **況** かく **書** 録
此 **書** 録 **況** かく **書** 録
様 **書** 録 **況** かく **書** 録
大 **書** 録 **況** かく **書** 録
リ **書** 録 **況** かく **書** 録

い **書** 録 **況** かく **書** 録
の **書** 録 **況** かく **書** 録
と **書** 録 **況** かく **書** 録
ひ **書** 録 **況** かく **書** 録
ら **書** 録 **況** かく **書** 録
久 **書** 録 **況** かく **書** 録
と **書** 録 **況** かく **書** 録
今 **書** 録 **況** かく **書** 録
の **書** 録 **況** かく **書** 録
場合 **書** 録 **況** かく **書** 録
あ **書** 録 **況** かく **書** 録
る **書** 録 **況** かく **書** 録
歩 **書** 録 **況** かく **書** 録
舞 **書** 録 **況** かく **書** 録
く **書** 録 **況** かく **書** 録

當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...
當方村は... 故村... 孫助... 川... 井...

此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...
此邊も大... 大... 大... 大...

垂玉吉 回 市川銀次郎 △

此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...
此... 此... 此... 此...

年ハ洋刺者のありと解ミ外四九 遊遊
持言事申中燈者其ハ一層別為然終
役物中ト大役と云後分よりハが是役
終終の勤しむる役を云對面敷扱へと云
いごとふは外込路巻切又對面の
せりやと五三 一門一家の言さうと燈を云
と云照是つてとちと見物と云燈扱扱の
せりやの役ハ流小遊と云れりやと
ハは社倉と云一四 二役ハ田舎の十中切
此中ちと一五 二役扱扱や小あきり用
段三 遊遊者扱扱を十中と云まひ
遊遊を治りやと云ハ遊遊者込込ハ
抄ハ一六 玉川の端水者と扱扱の幕
と云と云く中程者云茶の端が持せと
初めは扱扱の言云一七 花はやう京

遊のりらと云又遊と云つてその型入を
そけりや遊者も本らじハ遊南と云ハ
ふも遊と云らう又遊と云らう遊ハ
入る方と云と云扱扱と云ハ遊ハ
らうと云らう遊の扱扱と云客と云
る方扱扱は遊ハと云一八 遊ハ遊ハ
茶扱扱と云扱扱と云遊ハ目も遊を
と云と客と云らハ茶の扱扱を云ハ
扱扱と云扱扱と云つて遊ハ遊ハ
あると遊ハと云扱扱ハ遊ハ遊ハ
遊ハ遊ハ遊ハと云扱扱と云遊ハ
も茶と茶の扱扱と云茶ハ遊ハ遊ハ
と云の扱扱と云茶と云遊ハ遊ハ
と云の扱扱と云遊ハ遊ハ遊ハ
と云と云扱扱と云一九 三遊ハ遊ハ

京七九

足利一は、**協**のありし辰、**三**の辰
三は、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
見、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
三の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
か、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
三の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
お、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
ら、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
い、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
との、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
と、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
お、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
大、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
の、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰

参る、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
世、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
手、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
ト、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
七、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
多、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
と、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
飲、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
人、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
中、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
排、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
多、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
る、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
小、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰
け、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰、**三**の辰

初めあり又か長生院の時代は出でてころも
 止ぬた **既** 東あくをさう程までいれ
 已翼 **あり** けきも取ぬい終り小終其の
 お持まらして持もも大なる気持さうへ
 うのみのた欽せいつらもあまがたと具
 ころと云と云天皇さつの中さうと云皇
 びる麻乃ふ系幕のりと大皇と云乃
 中終るさぬ一ゆさくやれとのゆ法と云乃
 よもよとの幕乃んむ流久人じは
既 大儀十分系中園の取 **善** 母者取
 遊さる十分系は終くあつる **石** 系
 是はすも持まらる力ぬが終びすもい
 後と遊さる後と云て侍てわらう外ま
 務をさるうの事ト云あまもす **既** 乃
 終りお前終る非終る後 **切** 乃 乃後と

と云報さう史とわんまの後られと後のは
 指の暇を史でさくば出来ぬお後うれと云
 尾とお方との後さういお持まらる乳
 落のあまさうあつる目さる終るて終る
 切 **切** 二段はさる暇と史さるひまらぬ
 お後うれと云て終る史さ終るれい
 人あうく法乃の思事と乃さす **既** 乃
 既合部と破松平乃お持まらる乃力は
 切津の本と源乃終る **既** 乃 乃終る
 以前がけ付山殿神史つらとの史合部
 万端多考と云はるがも **既** 乃 乃終る
 乃の魂史と云はるがも **既** 乃 乃終る
 久人じは **切** 乃 乃中さる終る乃
 の史長終る史と云はる **既** 乃 乃終る
 と云 **既** 乃 乃終る **既** 乃 乃終る

切瀨田川と法興坊が持生の役と云ふ
分は天無く **見録** 下ノ金多末を
金伴瑞珠早中より其若くは法
興坊も金多末と云ふ程を成り申す
色なるてお申す七海等と云ふ二の
其一大木が持生を移し申す南
より大場者とも云ふもの云ふは
申す申すも申すも **見録** 下ノ金多末
と成り申す **見録** 下ノ金多末
大月勢り系出のし勅千石助成
井深 **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
おぼが福丸史別 **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
切瀨田川 **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
見録 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末

見録 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末
申す申す **見録** 下ノ金多末 **見録** 下ノ金多末

町中の会をせうくかひられ申ふ公跡
命く実を考ゆや火のあはれとてい
たれ七程の西門かひてせうくま
[弘九] まゝ八合せと花くしらの七坊
初く [トキ] ヤレコチ考く一也

〇〇〇

上上吉 尾上松緑 △

[弘九] 系松右史を法を法を法を法を
忠良を考ゆや火のあはれとてい
初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美
初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美
初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美

初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美
初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美
初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美
初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美
初美考極帝 [切] いづれをたけ仕
余は中も横川初美大考りてつれ
初梅を信来初まきしつら法考
美松夫人の初も余は初まきしつら
松緑史の初まきしつら [弘九] 三考り初美

さうらのはたをかき懸換川初平を成
友のづね降くともをせむらま
をわくしつとせ降をしく

上上吉 三井物産

改元 物産をせせけまき系高御製
と降者徳と長川若力内とくを
のさるるづね降くともをせむらま
は運動者の最安初保駐と強く切
子降と振川形とを初まの初降と
それと八内系者もくは運動者の上と強
く初降初安井内降は降初八降初降
る降初降二降ともを分とそれと記
建初降初降初降初降初降初降初降
まは初降初降初降初降初降初降
降初降初降初降初降初降初降初降

降初降初

上上吉 三井物産

改元 物産をせせけまき系高御製
と降者徳と長川若力内とくを
のさるるづね降くともをせむらま
は運動者の最安初保駐と強く切
子降と振川形とを初まの初降と
それと八内系者もくは運動者の上と強
く初降初安井内降は降初八降初降
る降初降二降ともを分とそれと記
建初降初降初降初降初降初降初降
まは初降初降初降初降初降初降
降初降初降初降初降初降初降初降

多所出類はは緒と大甲中々女梅井
司在彼地事も併く其の在りたるを
つて其の動を記す

上上吉回 市川流千部

此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す

大板を以て併く流千部を記す
伏念陽之流千部を記す
此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す

上上吉 三杯流千部

此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
此の園林史を以て其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す
及流千部は其の流千部を記す
流千部は其の流千部を記す

まは切尾金五段の山川は後六三茶
や切尾長柄のりら今も傳りも分は三茶
切尾崩のりら後六三茶を区中切尾
ら今迄身三切尾金五段と小橋橋平地
佛訪三茶多る平内の取切三茶を
のほり三茶今も分は三茶を区中切尾
のほり三茶今も分は三茶を区中切尾
たともむらも今も分は三茶を区中切尾
まは切尾のりら今も傳りも分は三茶

上上士 中村至七

△以外の三段の流中に自派に記すは
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
のよや切尾三茶今も分は三茶を区中切尾
たともむらも今も分は三茶を区中切尾

切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶
切尾切尾のりら今も傳りも分は三茶

あらむ方が難儀乃のわぶをり外なる
 かわれりて強きくも大伴のおぼらふか
 びさるもあふかおつとる若きうあ
 び外なるも行役とてても若き若し大
 切行那く [改] 志す行つとさかたなる
 若くしとてさすは若く [上] キヤビ
 コチウ祝玉

上上士



中村おき

[改] 尚附美を其利きの成約おけ
 子若實共ぞり外 [逢] 結とく祝
 若さふの件とてぬと人への位外也 [森]
 子梅笑ふ人へのや [改] のうさ
 若の此麻もゆか敷のさぬさへは外ぬ
 若も開けは後徳とる山秋也 [切]
 二限月り常は乳お秋條とて [只] 今

尚付美を其利きの成約おけ
 子若實共ぞり外 [逢] 結とく祝
 若さふの件とてぬと人への位外也 [森]
 子梅笑ふ人へのや [改] のうさ
 若の此麻もゆか敷のさぬさへは外ぬ
 若も開けは後徳とる山秋也 [切]
 二限月り常は乳お秋條とて [只] 今
 若は内実共の後乳お秋條月常とて
 子若實共ぞり外 [逢] 結とく祝
 若さふの件とてぬと人への位外也 [森]
 子梅笑ふ人へのや [改] のうさ
 若の此麻もゆか敷のさぬさへは外ぬ
 若も開けは後徳とる山秋也 [切]
 二限月り常は乳お秋條とて [只] 今

下

京

空動へのはつ、早稲平も是をたのむに
 今川内三郎たを侍り切廓の事を
 侍たるとをうとをまを海船のふえ
 ともしむとくくたてり孫
 角田信國善共保祐孫陸分は
 ひらてむもむとてりひすくとあれど
 たりりも末有もをてと九七
 自らよりめも今と設設のハイ
 りて孫念く孫惠助徳すも
 ひらひらけねてと殺ての設設
 尖とてとけしと「淫正」服うと
 たりしり系少くは空動す下屋とた
 大儀とるは「服」も尖は中
 てふうけと川内三郎はは
 大儀のうとむひ外ま七はをを

の表孫別孫なりとてとけしと
 ともは食ねおむとてと希代識
 様とてらるも切廓は切廓
 しく孫十人留り多府の出つは
 子初平も是事あり弁定つるも
 侍りも初平も是事少くは空動も陽
 集りとも是事川内さくも
 事をいとも早は姫様をうの二級
 されく孫切廓の各孫は
 と熊谷も其後二級とを末を
 リ「孫」が所中統る侍るも
 と「孫」の事あのもひり官も

人の命を奪ふは後大徳と云ふ也
 方外その世子に心死を引くるは病氣
 なる是れ中二の故也云々
 一云云々
 云々云々云々云々

ヒイキヤレ成強ク

上上士 三折縮丸

一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々

一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々
 一云云々云々

それ又いつちとと知らずかす井又三波孫
あつと信るると秋井其の地也とくまの
くひの美利の地であつ井の地は方か
おとせあ井中後なる積土の出動其
ひるの涼を彼の積土おまひつとと
思ひ外申く爲村さ待実久久々
あつ行玉てあ井それう紀の建寶
美利の出彼地もあきと信る [武九
まふ井たてすト出車抱成るやうて
及多波の地とて成るふはふく

【F】ヤレユチノ系林や〜

上上十 回 市川市境 △

【武九】美利の地は子良市境まであ井たきき
美利二階水と信の多あり 野田とあ二
人の界りあつ井が地との多信る

あひそとあ〜あ後地あ〜あ西人あ
らあが信る〜ああとあ井と対西後
八波〜あああ〜 [武九] あああ
揚の地をれと秋のああ〜あああ
でもりあ井とあれ〜あ南あああ
る井すトあああ切とああとああ
ああ〜あ井ぬと [武九] 三波のあ地は
代野七波の地 [武九] 是地とああは
後の信りああ [武九] ああ〜ああ
山中あ〜あああ〜ああ〜あ国平
さ〜あ〜あ [武九] ああ〜ああ
ああ〜ああ〜あす〜あすトあああ
【武九】ああ〜ああああああああ
ああ〜ああ〜ああ〜あああああ
ああ〜ああ〜ああ〜あああああ

古層長毛丸をたかまきり
改次勢り

八陣をよすく女川河
改次勢り

かたあはしてありふ外
改次勢り

出動はつらしく
上十

改次勢りの着しれ
改次勢り

久もろりいぬ改三勢り
改次勢り

改次勢りの着しれ
改次勢り

改次勢りの着しれ
改次勢り

改次勢りの着しれ
改次勢り

改次勢りの着しれ
改次勢り

改次勢りの着しれ
改次勢り

改次勢りの着しれ
改次勢り

下
上

本邦の事下流の事を知る
△以外の之は中へは自説記す

役者部各所系色終

安政四
丁巳春

役者都名所
大
中

手多13
236
~~194~~
~~195~~



後者部各本

五品定

▲三波老臣頭

大書口 尾末身見物

後撰のりあつた方終末の字のあつた
やうに取方での并 上 并 下 のくき

の件であつた後がぬれ改めるとある所を述

張るべき中野村を城に室山村野田

か後山根村は宗 書 柄が巻の下に

よう描きかかるといふか分りるとある所が

あつたは分りませんが中野の字は述べた

下と上并に三波松原の谷を指す所は後

述のあつたは分りませんが宗 書 柄が巻の下に

後述のあつたは分りませんが宗 書 柄が巻の下に

がらあつたは分りませんが宗 書 柄が巻の下に

13

大書口

の思ひ入は後安らむと入替とを
多きと松林出雲東三郎の孫は
あつたはなぬがよりいれし
さね場所もあつたはなぬ
小治とを大井のうら場
松林出雲東三郎の孫は
おせはなぬの孫はなぬ
トもとの思ひ入は下と
入はなぬも力あつたはなぬ
の故とをわが孫とて
トもとの思ひ入は下と
孫はなぬも力あつたはなぬ
の故とをわが孫とて
トもとの思ひ入は下と
孫はなぬも力あつたはなぬ
の故とをわが孫とて

白猿出雲とて
孫はなぬも力あつたはなぬ
の故とをわが孫とて
トもとの思ひ入は下と
孫はなぬも力あつたはなぬ
の故とをわが孫とて
トもとの思ひ入は下と
孫はなぬも力あつたはなぬ
の故とをわが孫とて
トもとの思ひ入は下と
孫はなぬも力あつたはなぬ
の故とをわが孫とて

此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
初めは、此の所は、[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、

此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、
此の所の川網をわらひ付せり。[五] 此の所は、

中...
 中...
 中...
 中...
 中...
 中...
 中...
 中...
 中...
 中...

の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...

▲別名

至正寺 市川園

松永秀九
 三役
 切及

物名 形方 理法 女形 の こと 及び 物 役 と
成す こと 也 夫れ あり 目 とも なる こと 人 々
大 切 なる 事 なる 事 あり けり けり けり けり
大 切 なる 事 あり けり けり けり けり けり
改 修 する 事 あり けり けり けり けり けり
即 ち 是 なる 事 あり けり けり けり けり けり
す こと 也 二 渡 なる 事 あり けり けり けり けり
の 侍 衆 あり けり けり けり けり けり けり
り 孫 衆 あり けり けり けり けり けり けり
勤 修 する 事 あり けり けり けり けり けり
信 用 なる 事 あり けり けり けり けり けり
田 川 なる 事 あり けり けり けり けり けり
後 世 なる 事 あり けり けり けり けり けり
彼 地 なる 事 あり けり けり けり けり けり
也 故 なる 事 あり けり けり けり けり けり

真 正 吉 回 市 川 筋 吉 壽 節

既 亦 物 形 方 理 法 女 形 の こと 及び 物 役 と
檢 査 する 事 あり けり けり けり けり けり
鬼 門 なる 事 あり けり けり けり けり けり
魂 形 なる 事 あり けり けり けり けり けり
は 三 勢 なる 事 あり けり けり けり けり けり
の 事 あり けり けり けり けり けり けり
中 なる 事 あり けり けり けり けり けり けり
也 老 切 なる 事 あり けり けり けり けり けり
東 山 なる 事 あり けり けり けり けり けり けり
三 なる 事 あり けり けり けり けり けり けり
斗 なる 事 あり けり けり けり けり けり けり
正 直 なる 事 あり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
へ 正 直 なる 事 あり けり けり けり けり けり けり

この道に在りては故城のて流後を全
驅大内多勢助百世流財孫 [善島志] 幸
以月日秋秋多勢助と出立給ふやうなるは故
御成るやしく切巻改流手法云々なる
平方の二段を併ぐ [改] 結切流後区
如伏念陽の向やまを走るまもが勤程
入致し二段後流後を氏山若流の由取
凡そ戦後にも出動さく其の在流を公
乃後を結む

▲実取後見

大正上吉 ○一 行 臣 市 宛 出 立

[改] 扱は即実取流後を結切流財孫
其の在流を氏山若流の由取
之より取巻の人は云々 [場] 二 段 月
小師と成入也結切流財孫の力なり

流後をり岩保を別下りよはる大勢ふ
く二切あるは流後をそのその大勢ふ入
るが後流財孫とて行ふは流財孫 [改] 扱
其切条也切流後流財孫の由取
中流後を安通行すて切も流財孫
り官実取流財孫の失入もその宗流也と尋
取入三割の流財孫と大割の流財孫の流
場も二つ流財孫は流財孫と結切流財孫
多と流財孫も二つ流財孫又、流財孫
別也と中流後流財孫切の流財孫
其流財孫の流財孫なるも流財孫
志流く [改] 扱流財孫の流財孫の流財孫
其流財孫の流財孫なるも流財孫
且取切流財孫の流財孫なるも流財孫

中夜目の方七杯も一両粒を三杯をそれより
少し多ければ好むは信内には少くは
のりともさるるに「あるるる」のうら
輪のふらふらと打たれし後をさそ
ふりし時とも場所ありくさへも
く

【場所】双膝の幻術ありきりりりり

切妻煮定味のみをとり定味のそと
わいのるるそと今一と二粒をけりりりり
ひきの煮たりの火をたりのそとそと
尖りしときそは信内なるるるそと

【場所】夜更の情ありて朝生は海に

【場所】智光秀の場所ありて朝生は海に

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

【場所】大いりく安き宗伊は汗と汗と切

之をく陣や陣留ま川あ二三つは
は留ま我林まき終る木よをきく
切も七八百之まのつれもは清抄初は
芝形入る孫令く [陸] とも老
才六目乃さあの中か実為と結来
くく [トイキ] ヤレユラ松一色く

▲実西歌遊之部

至王書 ①中村夜三 也

[陸] 内府上房外は就玉元者冬分折
去其申録後松字夜吳三対西は後
先事も勸や金 [切] 二級更は後大
丸は松松文方内らると知はふと終
後死をあり七はわると夢みでり外と
大を死く三級林も赤い浪を内のがん

松松文のつめを分は [書] 小あを内
の腹を下人孫まると下切を市よのま終り
いとまも赤巻かあ君らふか分出て
且ぬと赤巻を麻くを并 [陸] 三河守
能は依田別考 [切] 五くま七味茶の空
実と空のま也合ふあさくともあは松
かあ君まきく [書] 徳八 [書] ちやうか
佐秋かあく女房か夜さくともまはは松
あま花あ松は松うう大勢はつるま
あまのまあがうは後るのうのま入るや
分は天あく [陸] 又日終りまをま
のの前は松波八ふ力盡持ち大まあ
切の陣まあ松波九ふれも許くまあ
中録初前朝は清なや道はくともまは
二級孫まき [書] はか後九をま

打舟を執りて其の舟をもちて舟を走せ
かへば其の舟を其の舟に返し給ふ事
程中西の舟を其の舟に返し給ふ事
止むる事なき事也 切
所は其の舟に返し給ふ事也 切
たゞ其の舟に返し給ふ事也 切
程中西の舟を其の舟に返し給ふ事
な打舟を執りて其の舟をもちて舟を走
止むる事なき事也 切
所は其の舟に返し給ふ事也 切
たゞ其の舟に返し給ふ事也 切
程中西の舟を其の舟に返し給ふ事
な打舟を執りて其の舟をもちて舟を走
止むる事なき事也 切
所は其の舟に返し給ふ事也 切
たゞ其の舟に返し給ふ事也 切

いふは其の舟を其の舟に返し給ふ事
程中西の舟を其の舟に返し給ふ事
な打舟を執りて其の舟をもちて舟を走
止むる事なき事也 切
所は其の舟に返し給ふ事也 切
たゞ其の舟に返し給ふ事也 切

上上吉 中村 中村

切 切 切 切 切
いふは其の舟を其の舟に返し給ふ事
程中西の舟を其の舟に返し給ふ事
な打舟を執りて其の舟をもちて舟を走
止むる事なき事也 切
所は其の舟に返し給ふ事也 切
たゞ其の舟に返し給ふ事也 切

方う掛をいひさすく [説] 又月影の赤
ぐい出動のうは終るの所也加若川平
義弁を交場下孫三言天河や家あつた
まも大坂のれと振るはま更をたては分
らぬとて評があら井と云死く切藤又
妻との持評入いさすく六月多度
川新川中橋の末尾系務後の安造
宗任又方二言多被地も評よく
お出動の角は終徳田書とは下平さく
さうさうは二波石川要あり [抄] 今
おお後い人よさるべき死く切藤
端儀地獄長之和女難とてさみ
り常史おのそと及どのあががれお
の神もさ終書とて入はるる也
力病が終び井と云とくあり終り

[説] 系少くは至勤お下屋と云さる
壬生村の原中人は二波能の初目迄
他の方始よく付月も終生と云とて評
よく [川] 二波能の終るがのありて
のり井と切雲葉切二系判令とてお出
入と病く十月終りま終らばりゆは
終るの原也加若川平義弁を交場下
あり孫三言天河や家あつたのれと評よく
[説] 尚終る系少くは出動ま終轉
又入方村を交場下孫三言天河や家あつた
評よく下人終るはと女お市はあつたのり
お若弟く [川] 系下交場おのやとて
さうしてはお七が付まては若後
おお終まて [説] 併終る入る
終るくともま終るは終るて花

長井方のいれも侍く二のりのち名を以
出動多未保實城と長井又も山國を
探田村方の宿由多う後永の時平と書
香多[場所]いれも大段あれどおあり仕
余りのいれも侍く [記号]又川原の山あり

茶の奴知多仕下十地持井宗方のがれ
侍く系南側の出動ありのとて和久
出井風景の並葉の山 [記号]田方よりせう

ちうとまきおのちのねあり今更けお
河内さそがもよまういれもあつた
の心で分村以八陣と離ありが城の後
川原松原出の出入りも女侍で申へ

分村と切多保陣村と連やれあつた
まのかはむいれあり [記号]又山國を系
南より出動あつた探田村もあつた

上上吉 〇 晴馬山 南
[記号] 奥山出の... 山國を南側...
勤りは終系... 分村...
おまが... 山國... 女侍...
ともあつた侍くともまきお...
後山に山國を侍く

上上吉 〇 中山文系 小
[記号] 晴馬山 南
勤りは終系... 山國...
おまが... 山國...
ともあつた侍くともまきお...
後山に山國を侍く

系山に侍りて分村と山國を二のりの
系山に侍りて分村と山國を二のりの
系山に侍りて分村と山國を二のりの
系山に侍りて分村と山國を二のりの
系山に侍りて分村と山國を二のりの
系山に侍りて分村と山國を二のりの
系山に侍りて分村と山國を二のりの
系山に侍りて分村と山國を二のりの

やまを渡りてさるるに子に後いふ大
殺を勤乃月塘を以て勤者事
白を以て勤者事仁政録に奴甲集
る信多のりも許り以て中々
多源を塘海を許りて尚忍年
往大に体社に跡念く去りてたの由
勤を待り

上上吉 〇 浅尾為事部

此の事後史を并て去流後千事梅
正保の事さつある勢たあつたのれ
も許り三勢の其首元と怒沢と
事各各知りたつたさあゆめ切す
ま川とた好友をたつて尚忍元事
山とく山出勤事陽射と密事云事
名留小中を和信事後他切各以事

一の事梅事系事 正保 為事 出流分
之勤者事事由今か 尚忍元事
と成りて事事の事事成りて今
あ

△此の故後の中は自録に

若女形巻柱

至吉 〇 山下金作

此の扱は即天考やたを以て今
者其申経者材と夫方と流 場
中るか後いお持支く二改女形月小
村西市改り合員持より整中
此の三改後が流材と力と事と
之合さく小あさ事あふ相以事
の事と事信十分可 地方の事
を以て入事と以て此法成り流

産む身も乳母といつては秋の肥等
をうへの侍所実々多秋の母をといへ
しと後みんを後を色味と辨自若
くは時令地火のたつ年大てさく
[次] 三の習うは行ら芳徳と業毎尾
さくさくは [四] みるま女房をい内
の候みまの豊合とらと多師の女房
とさくまくと穿やは候みまをその
くさくさくをさく [次] 又月習う
茶を論けい松本 [茶] 八時待候
はさくまくと女房をさくと思ひ
動きして妻の帯とさくといふ
ふ節の百女的情さくさくけいせいのか
十かへさくさくさくさくさくさく

く二級女房をかたさくさくさくさく
又後女房あつさくさくさくさくさく
か勤まき入と物 [次] 多思うりお
宿場二浦やむさく物支く女房
さく下女あさく二級たさくして降す
初級も力さくさくさく切正の津氏と女
さくさく [茶] 延名女は多思延さく失
小はさく切後さくさくさくさくさくさく
とのひは後のさくさくさくさくさく
ゆさくさくさくさくさくさくさくさく
大て死くさくさくさく [次] 次
初の豊合部と後守織は女房あつ
物さくさくさくさくさくさくさく
女史とむさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさく [次] 出部さく

糸山より出動す湯船を在り安容
一谷津若原より二谷津へ中程より
近江津まで付きて三谷川 川 大坂と
日津津のく切か七下かお杉お杉
くありま指入ら跡念く 段 ぶ
をまの荒くいそを流すく

▲別頭

真書 中村秋六有

改 扱ひお指入ら跡念く 改 ぶ
ま多角は往の徳傳を 改 ぶ
侍さや分は二谷女六秋か 改 ぶ
持まのあぬ 改 ぶ
く 改 ぶ
中程より安容が付きて 改 ぶ
改 ぶ

とやきく 改 ぶ
様と 改 ぶ
儀 改 ぶ
甘 改 ぶ
口 改 ぶ
お 改 ぶ
先 改 ぶ
く 改 ぶ
大 改 ぶ
女 改 ぶ
お 改 ぶ
お 改 ぶ
角 改 ぶ

後三原野村の刻
はる青陽鳥
鳥



後田取千両のちり



切一谷娘軍元



日進江流氏光陣鏡



日鬼一法服三畧中色



日亥紙麻子



叶と鬼下坊の娘とく烟の辰衣
おまろく侍も糸分途志や定程
入と持命く **辰衣** 志分途志
おまろく糸分途志 **辰衣** 志分途志

上上吉  後川友衣也

辰衣 今おの六考史地七中并志雲南
の程の程徳とけの史後志とささる
二枚娘小宅 **物** 志分途志
辰衣 志分途志

辰衣 三考り妹習山と志分途志
辰衣 志分途志
志分途志

の志分途志
志分途志
志分途志

志分途志
志分途志

志分途志
志分途志

志分途志
志分途志

上上十 〇 行思影之助 △

秋夜思出で外を歩くと千尋梅
跡をたいては探りて勢白妙三股行評
くそらうに林往ら尾遠き以紙被
地も降りく又く望る影以り紙被
の魂評は去る外に戸を閉る女取
は月申のし附るは時方に出移りて
去るを成るは以紙被と括りく

上上十 〇 中村千之助 △

千之助史で外を歩くと千
尋梅跡をたいては探りて勢白妙三股行評
くそらうに林往ら尾遠き以紙被
地も降りく又く望る影以り紙被
の魂評は去る外に戸を閉る女取
は月申のし附るは時方に出移りて
去るを成るは以紙被と括りく

とを春夜思は外を歩くと千尋梅
跡をたいては探りて勢白妙三股行評
くそらうに林往ら尾遠き以紙被
地も降りく又く望る影以り紙被
の魂評は去る外に戸を閉る女取
は月申のし附るは時方に出移りて
去るを成るは以紙被と括りく

成る迄に身の内を去るもの事なり
 とて争ふは後之を思ふ事なり
 ると云ふ事には天に於て二級にわかれ
 ねと内の階 [抄] 松林をわたくし
[三] 松林をわたくし
 られたる二階がふたつにわかれ
 とて争ふ事 [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ

と物にあり [抄] 松林をわたくし
 二級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ
 三級にわかれ [三] 三級にわかれ

此等七の云々それより足元のを
有り合足のをばり足元新との方ね
をばり合足のをばり足元新との方ね
此のまづうん後あつてもてさく

場が 十敷切きと長及公出のりま
がうん二流様は并と後松松出のり
生捕りとも大あつて 改次 二股又
よふ六代のはちをさゆう清とより物
の二敷とあつて三浦大助と成りて是
らうけ付き力の在柄を介提束茶
と新き六代もと助とらうるはあつて
物ぞう并 五葉 皆のりやを 例年
百七と下成りと後あつて長口と成り
は附けいよ下りまあつて 田代并と成
より物との二流あつてひそりあつて

此等七の云々それより足元のを
有り合足のをばり足元新との方ね
をばり合足のをばり足元新との方ね
此のまづうん後あつてもてさく
場が 十敷切きと長及公出のりま
がうん二流様は并と後松松出のり
生捕りとも大あつて 改次 二股又
よふ六代のはちをさゆう清とより物
の二敷とあつて三浦大助と成りて是
らうけ付き力の在柄を介提束茶
と新き六代もと助とらうるはあつて
物ぞう并 五葉 皆のりやを 例年
百七と下成りと後あつて長口と成り
は附けいよ下りまあつて 田代并と成
より物との二流あつてひそりあつて
此等七の云々それより足元のを
有り合足のをばり足元新との方ね
をばり合足のをばり足元新との方ね
此のまづうん後あつてもてさく
場が 十敷切きと長及公出のりま
がうん二流様は并と後松松出のり
生捕りとも大あつて 改次 二股又
よふ六代のはちをさゆう清とより物
の二敷とあつて三浦大助と成りて是
らうけ付き力の在柄を介提束茶
と新き六代もと助とらうるはあつて
物ぞう并 五葉 皆のりやを 例年
百七と下成りと後あつて長口と成り
は附けいよ下りまあつて 田代并と成
より物との二流あつてひそりあつて

出井之孫侍内之...
[西ノ] 小政...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...

懐...
[西ノ] 小政...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...
[大] 中...
[聖] 内...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

大正

少々の山並動き湯轉る本形跡を
川ありは山並深き人まのなる大坂と
は評ある身振きし七評あるあり七評
命く一の各思知の跡をおおす人の
お教申命陣やた辰と云六[改]の
懐失り人の骨折る程急はま
おれし行分入ら鬼を討きし七列
鬼は法眼や分いおけれどし七の評も
ろくてお命く由の源氏の時改[改]
聖大坂表をまこひの時改の評ま
すし七の存命す内内をさく右
お養史の評まよる西本場の聖方
まきし玉の思まおれまんとま形の
まきし七の川にお方けお流らひ
まれおごそま形のま入の評命く

お命く[改]併初や再りあ入と命
人命のいふ本場の親友おまのまれと
まをまをまのまの大改をおけおれり
ま指くじ行分内時三のまのまの
懐史の親友おあれた人のいふお
まのまの内のまのまのまのまを
結末止る評制も赤例と評ひまの
おれらのまのまのまのまのまの
のまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま

者 長々舎三都子
作 八文舎自笑

没表初名本大坂表也終

安政四
丁巳春

役者都
名所
下

多
236
198
198
198

各所左邊者同録

義官陸 各代

清書院陸 各代

△今之於名ぬより九のこころ

▲五段巻段

太上吉 尚書表

源(名)山(今)上(流)の(地)水

▲五段別段

至吉 市川山園

返(流)行(お)て(織)者(々) 西陣

▲五段之部

上上吉 尾上松寿

衆(者)々(々)の(こ)ろ(に)流

上上吉

中村福助
三掛福九



上上音

市川市巻

娘遠うえんやがら麻子歌
過く山出巻の木後(の)川巻
二角

上上士

嵐松三郎

竹段とあてもうつり丸漆物

上上士

市川箱巻

がらうらうらうらうらうら水焼

坂東大下巻

上上

嵐三下巻

改^改中村一様

上^改あれもあつめ^改西田
やと

上上

嵐鱗子

そこのちよんは巻巻の少も

実川正次巻

市川新巻

上上

尾上登巻

嵐市巻

中村仲巻

中村秋巻

市川後巻

嵐松巻

尾上和巻

がれもかまの巻巻^{そり}

中村巻

市川巻

尾上新巻

上上

のそり巻巻の巻巻の巻巻

▲実西巻^改外巻

中山市巻

上上士

川巻のうらうらわらうらうら

上上吉

相室の十六

以後より切味の死を要する

上上吉

市川屋後

まをりつてつと目の中をまをる

上上吉

淡尾の六

つとくくかたあり 運命 定法

上上吉

中村の六

形をきけてあかたをたす

上上吉

中村の六

とこのれん中をまへて水京

上上

市川屋後

市川三九

三升編七

嵐冠の六

中村の六

行屋の六

坂東屋の六

尾上錦十

中村の六

市川屋の六

市川屋の六

尾上三九

中村の六

行屋の六

嵐冠の六

淡尾十

嵐冠の六

市川屋の六

嵐冠の六

嵐冠の六

上上

市川新車
尾上松平

いづれか出てくるもの斗車

▲尾上松平の部

中村大右

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 市川新車

尾上松平の部

上上吉 市川新車

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 中村大右

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

上上吉 尾上松平

尾上松平の部

娘没... 人形

▲五段巻七體

至七書 市川團扇

香... 名案

▲子役之部

市川宗九

中村錦太郎

三井の孫助

片岡千恵蔵

尾上金三郎

中村定吉

嵐雛三郎

▲雛子之部

三法... 安富

三法... 安富

三法... 安富

三法... 安富

三法... 安富

三法... 安富

▲狂言他者之部

赤河政助

高島忠生

安見東助

三井家信

松崎燈見

三井家多

三井家信

本場齋藤

官 義

上

産

秀為之誘

▲頭取之部

山嵐青士帝
尾上十七宮
淡尾赤赤赤
三并也赤赤
沃山於虎
山嵐青士

千変萬化万来乐

叶

▲五段巻頭

全吉 山嵐青士帝

既云叔乞下る名をわんせしる振事落
中よ并せし事して志海や其れを成務
採て中并 辨コレ既なる流りよ
その心 婦連福をんごふとの心 瑞丸
は福赤より福丸んごふとの心 既云赤
くのりねむくとの夫陸おしあきしん
全同縁の列におひもどあきしん
いし并 上キ その心 既云 振事
女一版をいひ表地を付也取をい
よる名多あきしんを右切握赤あきし
松葉くは出勳を請く目出あきし
赤陽を今城を捕赤赤赤赤赤赤
赤のるは良善く出勳は地がも并

奥の山をさす海は遠くは浪をいれ
場の烟地がなほうた飛雁の揚とし
と田々も後のまばらなを育つるを
と世をいふくわく き烟地もく
後のまばらなりひきよのあきことろを
狗との信もよく 兄也ひきよは
村致さぬ後々張る身もあつくる
中分は 善也あつて成候のなりき
訓をうた内福野末の訓をいふ
いふをくをわく村致九をいふ切候
あつくる中分は比場が一日の山を
村の 善也いふのまばらなりはり
比場二幕体と成り候今く出候
史とのいふ方あつて種をいふは場り
眼目あつて内分は病乳といふも

陸を渡りあつたりと云ふ余程揚より
ふゆでや林 切二坂なり而も揚の
原小丘方舟より打渡り中より出され
よりいふは大渡路といふ所なり
分の 善也幕切し後々揚三つ失候
幕のまばらなりと云く 兄也三
少と云ふは内分南力のつらなり
浦の原船を押しよる候は待り 善也
幕切幕幕共房八とのまばらなり
許り内分は候候のまばらなり
吟味を親交を親月とあつては海
を渡り候はなり幸地程なり
兄也まばらなり骨切候はなり
中房八なりと云ふなりと云ふなり
と房八を教し房八の心と云く

の御初りのよりらく、是中をよふ
か **四** 如根教額をよふ跡に
尖らるる御別してつる方々す
お勤めは内なることには、
さうて安達を付して別を
控領するの御初めの御
よふつら内藤村を侍り
後後扶の御初めを侍り
よふつらよふつら **五** 定らるる
よふつらよふつら **六** 定らるる
よふつらよふつら **七** 定らるる
よふつらよふつら **八** 定らるる
よふつらよふつら **九** 定らるる
よふつらよふつら **十** 定らるる

御初りのよりらく、是中をよふ
か **四** 如根教額をよふ跡に
尖らるる御別してつる方々す
お勤めは内なることには、
さうて安達を付して別を
控領するの御初めの御
よふつら内藤村を侍り
後後扶の御初めを侍り
よふつらよふつら **五** 定らるる
よふつらよふつら **六** 定らるる
よふつらよふつら **七** 定らるる
よふつらよふつら **八** 定らるる
よふつらよふつら **九** 定らるる
よふつらよふつら **十** 定らるる

▲五被別領

聖吉 回 市川出陣

御初りのよりらく、是中をよふ
か **四** 如根教額をよふ跡に
尖らるる御別してつる方々す
お勤めは内なることには、
さうて安達を付して別を
控領するの御初めの御
よふつら内藤村を侍り
後後扶の御初めを侍り
よふつらよふつら **五** 定らるる
よふつらよふつら **六** 定らるる
よふつらよふつら **七** 定らるる
よふつらよふつら **八** 定らるる
よふつらよふつら **九** 定らるる
よふつらよふつら **十** 定らるる

大津刺(とら)の針(とら)と云うが、
まじり針(とら)と云ふ事、
海(とら)の針(とら)と云ふ事、
うづら(とら)の針(とら)と云ふ事、
それ(とら)の針(とら)と云ふ事、
これ(とら)の針(とら)と云ふ事、
可(とら)の針(とら)と云ふ事、
海(とら)の針(とら)と云ふ事、
それ(とら)の針(とら)と云ふ事、
下(とら)の針(とら)と云ふ事、
上(とら)の針(とら)と云ふ事、
ち(とら)の針(とら)と云ふ事、
さ(とら)の針(とら)と云ふ事、
の(とら)の針(とら)と云ふ事、

新(とら)の針(とら)と云ふ事、
志(とら)の針(とら)と云ふ事、
か(とら)の針(とら)と云ふ事、
の(とら)の針(とら)と云ふ事、
せ(とら)の針(とら)と云ふ事、
洋(とら)の針(とら)と云ふ事、
の(とら)の針(とら)と云ふ事、
今(とら)の針(とら)と云ふ事、
さ(とら)の針(とら)と云ふ事、
あ(とら)の針(とら)と云ふ事、
お(とら)の針(とら)と云ふ事、
か(とら)の針(とら)と云ふ事、
成(とら)の針(とら)と云ふ事、
さ(とら)の針(とら)と云ふ事、
の(とら)の針(とら)と云ふ事、

小東は安冬の内出勅を以て自國を
しんごもあらざるに外出也わんく
先手は後うして冬入の事あらうといふ
る物も然らざるに實は行てもなきといふ
物も然らざるの事も亦然の事なる
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
あり其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事

七人の流文より付て書か所書中より
是の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事
其の事も亦くも成ぬがよりうの事

升後病明と成てのち多きけいひを
 ぬりて分升竹を掃か夫を
 出、金糸升女のむき、
 ぶちおき形、山出動被地を
 ひの外路をき、あつて成、跡り多
 坊升、
 身想るま、
 身想るま、
 身想るま、

三股之部

上上吉 尾上松壽

三股、い形が、
 升、
 次出、
 神、

不測、
 浪舟、
 味、
 二股、
 入、
 仕、
 取、
 名、
 それ、
 切、

と信ぬれば其の情もさるるも後を
去らば其の心も未だ切なかり
三つの情もさるる中へ申す
く [改] それも古希な程に出勤
先達を降し六月翌日お決りて八
大佛を合まう大助さるるは二夜房
八夜通もおぼたをりきこし
切古へおぼたをりきこし
[改] 切古へおぼたをりきこし
余は神へいささかおぼたをりきこし
何れおぼたをりきこしと教か
神は神へいささかおぼたをりきこし
出勤と病も [改] 出勤と病も
まゝ

上上吉 中村後助

上上吉 三折箱丸
[改] 三折箱丸は神の御心
神は神へいささかおぼたをりきこし
余は神へいささかおぼたをりきこし
何れおぼたをりきこしと教か
神は神へいささかおぼたをりきこし
出勤と病も [改] 出勤と病も
まゝ

推の内も申くうん人々をさしすこ
 何なきに若菜由さきと成る所依りて
 跡をきりし所いんせの中におぼれり
 地井 **書** 二段は亦様と後流をいりて
 思ひ外初を地合いんせ **地** 人形
 ぬの内かろとも **実** 瑞珠の
 跡をより西のふり **名** 果 一 所冬ふ切
 橋も跡いんせ **人** 形は
 とる所 **地** 合いんせのうん人形
 こと **年** 一 **所** 果 **一** 所冬ふ切
 かりん **人** 形 **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 若菜 **物** 形 **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 とう **所** 果 **一** 所冬ふ切 **地** 合いんせ
 地 **合** いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 周 **所** 果 **一** 所冬ふ切 **地** 合いんせ

六月 若菜 形 **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 田内 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 大 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 内 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 も **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 跡 **合** いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 種 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 跡 **合** いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 大 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 多 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 且 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 地 **合** いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 知 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
 何 **地** 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ
地 合いんせ **地** 合いんせ **地** 合いんせ

此流波峯原他の芳嶋田邊のまゝに
 云中を廻りて出杖素性まゝに人の氣
 ざりたるまゝの杖をわらうとしくも清
 うことまゝのまゝなりと成る希はりては
 せうよりのまゝの杖をわらうとしくも清
 じと異いやく余のよりのまゝの杖をわら
 うまゝのまゝの杖をわらうとしくも清
 清なるは利便なるまゝの杖をわらうと
 次いで甲と夜は標と極功後せん
 ともありて後出た得多うとありてま
 かりありては杖をわらうとしくも清
 とせりひとありて杖をわらうとしくも清
 次漏田の原よりわらうとしくも清
 は大和橋のよりまゝの杖をわらうと
 大和橋のよりまゝの杖をわらうと

大和名籍として白く付して谷あり
 取柄りの原他の方端よりまゝの杖を
 と脚の尖をとりて杖をわらうとしくも清
 武町の原方よりまゝの杖をわらうと
 動と清なり ヒヤ 杖をわらうと
 ○大和町の原方よりまゝの杖をわら
 出杖の原よりまゝの杖をわらうと
 穠木人の杖をわらうとしくも清
 杖を 杖 杖をわらうとしくも清
 若女は杖をわらうとしくも清
 杖を 杖 杖をわらうとしくも清
 の外より杖をわらうとしくも清
 と小六は杖をわらうとしくも清
 く 杖 杖をわらうとしくも清
 杖をわらうとしくも清

し其より并し [一] 何れより [二] 何れより
て并し [三] 何れより [四] 何れより [五] 何れより
并し [六] 何れより [七] 何れより [八] 何れより
と連し [九] 何れより [一〇] 何れより [一一] 何れより
より [一二] 何れより [一三] 何れより [一四] 何れより
利して [一五] 何れより [一六] 何れより [一七] 何れより
其美 [一八] 何れより [一九] 何れより [二〇] 何れより
其美 [二一] 何れより [二二] 何れより [二三] 何れより
勳りて [二四] 何れより [二五] 何れより [二六] 何れより
トヤ [二七] 何れより [二八] 何れより [二九] 何れより

上上言 [三〇] 美女形之部 中村大権

其美 [三二] 何れより [三三] 何れより [三四] 何れより
其美 [三五] 何れより [三六] 何れより [三七] 何れより
勳りて [三八] 何れより [三九] 何れより [四〇] 何れより
トヤ [四一] 何れより [四二] 何れより [四三] 何れより
其美 [四四] 何れより [四五] 何れより [四六] 何れより
其美 [四七] 何れより [四八] 何れより [四九] 何れより
勳りて [五〇] 何れより [五一] 何れより [五二] 何れより
トヤ [五三] 何れより [五四] 何れより [五五] 何れより
其美 [五六] 何れより [五七] 何れより [五八] 何れより
其美 [五九] 何れより [六〇] 何れより [六一] 何れより
勳りて [六二] 何れより [六三] 何れより [六四] 何れより
トヤ [六五] 何れより [六六] 何れより [六七] 何れより
其美 [六八] 何れより [六九] 何れより [七〇] 何れより
其美 [七一] 何れより [七二] 何れより [七三] 何れより
勳りて [七四] 何れより [七五] 何れより [七六] 何れより
トヤ [七七] 何れより [七八] 何れより [七九] 何れより
其美 [八〇] 何れより [八一] 何れより [八二] 何れより
其美 [八三] 何れより [八四] 何れより [八五] 何れより
勳りて [八六] 何れより [八七] 何れより [八八] 何れより
トヤ [八九] 何れより [九〇] 何れより [九一] 何れより
其美 [九二] 何れより [九三] 何れより [九四] 何れより
其美 [九五] 何れより [九六] 何れより [九七] 何れより
勳りて [九八] 何れより [九九] 何れより [一〇〇] 何れより
トヤ [一〇一] 何れより [一〇二] 何れより [一〇三] 何れより
其美 [一〇四] 何れより [一〇五] 何れより [一〇六] 何れより
其美 [一〇七] 何れより [一〇八] 何れより [一〇九] 何れより
勳りて [一一〇] 何れより [一一一] 何れより [一一二] 何れより
トヤ [一一三] 何れより [一一四] 何れより [一一五] 何れより
其美 [一一六] 何れより [一一七] 何れより [一一八] 何れより
其美 [一二〇] 何れより [一二一] 何れより [一二二] 何れより
勳りて [一二三] 何れより [一二四] 何れより [一二五] 何れより
トヤ [一二六] 何れより [一二七] 何れより [一二八] 何れより
其美 [一二九] 何れより [一三〇] 何れより [一三一] 何れより
其美 [一三二] 何れより [一三三] 何れより [一三四] 何れより
勳りて [一三五] 何れより [一三六] 何れより [一三七] 何れより
トヤ [一三八] 何れより [一三九] 何れより [一四〇] 何れより
其美 [一四一] 何れより [一四二] 何れより [一四三] 何れより
其美 [一四五] 何れより [一四六] 何れより [一四七] 何れより
勳りて [一四八] 何れより [一四九] 何れより [一五〇] 何れより
トヤ [一五一] 何れより [一五二] 何れより [一五三] 何れより
其美 [一五四] 何れより [一五五] 何れより [一五六] 何れより
其美 [一五七] 何れより [一五八] 何れより [一五九] 何れより
勳りて [一六〇] 何れより [一六一] 何れより [一六二] 何れより
トヤ [一六三] 何れより [一六四] 何れより [一六五] 何れより
其美 [一六七] 何れより [一六八] 何れより [一六九] 何れより
其美 [一七〇] 何れより [一七一] 何れより [一七二] 何れより
勳りて [一七三] 何れより [一七四] 何れより [一七五] 何れより
トヤ [一七八] 何れより [一七九] 何れより [一八〇] 何れより
其美 [一八三] 何れより [一八四] 何れより [一八五] 何れより
其美 [一八七] 何れより [一八八] 何れより [一八九] 何れより
勳りて [一九〇] 何れより [一九一] 何れより [一九二] 何れより
トヤ [一九三] 何れより [一九四] 何れより [一九五] 何れより
其美 [一九八] 何れより [一九九] 何れより [二〇〇] 何れより

其美 [二〇一] 何れより [二〇二] 何れより [二〇三] 何れより
其美 [二〇四] 何れより [二〇五] 何れより [二〇六] 何れより
勳りて [二〇七] 何れより [二〇八] 何れより [二〇九] 何れより
トヤ [二一一] 何れより [二一二] 何れより [二一三] 何れより
其美 [二一六] 何れより [二一七] 何れより [二一八] 何れより
其美 [二二〇] 何れより [二二一] 何れより [二二二] 何れより
勳りて [二二三] 何れより [二二四] 何れより [二二五] 何れより
トヤ [二二八] 何れより [二二九] 何れより [二三〇] 何れより
其美 [二三三] 何れより [二三四] 何れより [二三五] 何れより
其美 [二三七] 何れより [二三八] 何れより [二三九] 何れより
勳りて [二四〇] 何れより [二四一] 何れより [二四二] 何れより
トヤ [二四五] 何れより [二四六] 何れより [二四七] 何れより
其美 [二五〇] 何れより [二五一] 何れより [二五二] 何れより
其美 [二五三] 何れより [二五四] 何れより [二五五] 何れより
勳りて [二五七] 何れより [二五八] 何れより [二五九] 何れより
トヤ [二六〇] 何れより [二六一] 何れより [二六二] 何れより
其美 [二六五] 何れより [二六六] 何れより [二六七] 何れより
其美 [二七〇] 何れより [二七一] 何れより [二七二] 何れより
勳りて [二七三] 何れより [二七四] 何れより [二七五] 何れより
トヤ [二七八] 何れより [二七九] 何れより [二八〇] 何れより
其美 [二八三] 何れより [二八四] 何れより [二八五] 何れより
其美 [二八七] 何れより [二八八] 何れより [二八九] 何れより
勳りて [二九〇] 何れより [二九一] 何れより [二九二] 何れより
トヤ [二九三] 何れより [二九四] 何れより [二九五] 何れより
其美 [二九七] 何れより [二九八] 何れより [二九九] 何れより
其美 [三〇〇] 何れより [三〇一] 何れより [三〇二] 何れより
勳りて [三〇三] 何れより [三〇四] 何れより [三〇五] 何れより
トヤ [三〇七] 何れより [三〇八] 何れより [三〇九] 何れより
其美 [三一〇] 何れより [三一〇] 何れより [三一〇] 何れより

如動と稱す并
上上吉



多川を治

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

如動と稱す并
上上吉

多... 二... の
と...
及...
る...
多...
多...
少...
既...
是...

上上吉 回 市川新車

既...
出...
と...
後...
長...

ま...
形...
任...
そ...
併...
さ...
後...
社...
ま...
お...
出...
上上吉 回 市川新車

既...
と...

始さうあけのせし流のりぬも許く又月替
後山に取むるのりくとおのり外山を女
岩及びわらわくたをいふるはれり
好く見物に角の切をせしは
新橋より大なる更よあつたかく
西形西の橋とさうさぬうふをさのり
とゆふまの山動を流す

▲三波忠臣

至正書 市川團扇

市川の流るる二河を名流お流す
正七年あつた目く「老」さく白流
くゆけりては千流川橋をさし
名流を流すはてのさうよとく
てあつたく山家流を流す
流すはれりては山動流

許く流るる流るる山動のり
政の流るる流るる山動のり
よと流るる流るる山動のり
かゆ流るる流るる山動のり
あつた流るる流るる山動のり
はれり流るる流るる山動のり
食物さう流るる流るる山動のり
よと流るる流るる山動のり
あつた流るる流るる山動のり
はれり流るる流るる山動のり
食物さう流るる流るる山動のり
よと流るる流るる山動のり
あつた流るる流るる山動のり
はれり流るる流るる山動のり
食物さう流るる流るる山動のり

市川團扇

んくは城守とて年々同利及切替
物もな存じ名位多きとて其城守に
よくる事多かるべきとの事判別
の申さるる事候者候も其等の情
意なきは後世にのるも爲り候
ふんく **五條** 金屋居候所の七張を
おとせ候と申すを其れに後一法を
見せられたる事候と成力なりと申す
二 其申末迄六年との事候と申す
お尋ね申すは程なき所候が物
ゆ分物も力なき方を辨別せられたる
事も申す事候と申す事候と申す
此等の事候と申す事候と申す
三 **四** **五** **六** **七** **八** **九**
九つと申す事候と申す事候と申す

五十二

申す候も其は申す事候と申す事候と申す
事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す
申す事候と申す事候と申す事候と申す

五十三

侍も大さきとありけり係はさきと
の款付はゆかきとありけり
山出動とありけり外餘はさきとありけり
ゆかきとありけり山出動とありけり
ありけり山出動とありけり
ゆかきとありけり山出動とありけり
ありけり山出動とありけり

作 都菴可様

者 長生舎三伍

後考取名もあはれ也

三座惣持者目録

積善二所目 森田助彌

同 二所目 市村助三郎

同 三所目 河原崎後南

○見多又十三次名もあはれ也

▲客座

真書 市川團次

久々の内取まて之難後と市川

▲立役巻頭

真書 丹阿彌左衛門

松島くさありてのこぬ久松

▲立役巻物

真書 市川團次

いふうの大役も清おき七の役

▲若き二階対

上上吉

中村頼助

中村のひまわりと申すは命を換

上上吉

伊東孝之丞

伊東の孝之丞は後醍醐天皇の御代

▲五役之部

上上吉

因三下丞

因三の三下丞は後醍醐天皇の御代

上上吉

市川用亮

市川の用亮は後醍醐天皇の御代

上上吉

市川新井

市川の新井は後醍醐天皇の御代

上上吉

赤谷五郎

赤谷の五郎は後醍醐天皇の御代

上上吉

市川國重

市川の國重は後醍醐天皇の御代

上上吉

法村新井

法村の新井は後醍醐天皇の御代

上上吉

市川九郎

市川の九郎は後醍醐天皇の御代

上上吉

市川頼助

市川の頼助は後醍醐天皇の御代

上上吉

中村延重

中村の延重は後醍醐天皇の御代

上上吉

市川徳松

市川の徳松は後醍醐天皇の御代

上上吉

伊東依下丞

伊東の依下丞は後醍醐天皇の御代

上上吉

▲五役後見

五役の後見は後醍醐天皇の御代

上上吉

森田是好

森田の是好は後醍醐天皇の御代

上上吉

▲寒風後部

大谷

秋波のひさぎをもちまきまき

上上吉

浅尾

のりまき大坂、鴨子

上上吉

浅尾

のりまき大坂、鴨子

上上士

中山

のりまき大坂、鴨子

上上士

中村

のりまき大坂、鴨子

上上士

中村

のりまき大坂、鴨子

上上士

中村

のりまき大坂、鴨子

上上

関

松本

松本

松本

かきまき大坂、鴨子

中村

松本

松本

松本

松本

上上

上上吉

▲若女形

尾

かきまき大坂、鴨子

▲若女形

上上吉

尾三系系

尾三系系のつとめありては

▲若多形之部

岩井系系

杜若くしはるこれのつとめあり

上上吉

戸田系系

おろしきもはけり系系

上上吉

市川系系

ききあゆの橋よりりて天龍川

上上吉

井上系系

市村家のつとめありては

上上吉

市村系系

色はながくしはるこれのつとめあり

上上吉

松東系系

おろしきもはけり系系

上上

嵐小六

中村系系

おろしきもはけり系系

坂本系系

尾三系系

戸田系系

岩井系系

上上

おろしきもはけり系系

▲南系系

市村系系

法村系系

森田系系

奥系系

坂本系系

市村系系

上上

真主書

▲惣改見

▲改取之部

▲改取之部

▲改取之部

中村松次丞

三條勘次丞

暖谷七郎

坂東松平丞

▲狂言化装之部

勝見彌三

河竹新七

三井三三丞

榎田清助

後田清助

市松和助

後田清三丞
梅津春助

千鶴万葉集
叶

安政三丙辰四月五日

歌前紙類之書信

作者中村松次丞
弘安三十七年

かめその形跡をよめての弁せ
おまのよおのよまぐりまのよま
むのよまぐりまのよまぐりまのよま
このよまぐりま

一寸の披瀝十五升
一江戸評に後月録史之便よ
お存の政便の中川に全
お見く今も此に在る評書の
多那合名は舟の改定は
彫刻の多きと喜永の書
仕人此後評書の出さるる

辰
植月

板
元

大坂心齋橋通本町南口入
書林 河内屋平七板

